

保健体育（保健分野） - 3（第2学年） 心肺蘇生法について，ブレインストーミングや実習を
【学習活動の概要】 活用し，思考を促す事例

1 単元名 傷害の防止		
2 単元の目標（指導のねらい） 交通事故や自然災害による傷害の防止と，応急手当によって傷害の悪化を防止することができることを理解できるようにし，個人生活において健康で安全な生活を営む資質や能力を育てる。		
3 評価規準 【健康・安全への関心・意欲・態度】 ・傷害の防止について関心をもち，学習活動に意欲的に取り組もうとしている。 【健康・安全についての思考・判断】 ・傷害の防止について，課題の解決を目指して，知識を活用した学習活動などにより，科学的に考え，判断し，それらを表している。 【健康・安全についての知識・理解】 ・交通事故や自然災害などによる傷害の発生要因やそれらによる傷害の防止，応急手当について，課題の解決に役立つ基礎的な事項及びそれらと生活との関わりを理解している。		
4 教材 本単元では，傷害の防止について，傷害の発生にはさまざまな要因があり，それらに対する適切な対策によって傷害の多くは防止できること，また，応急手当は傷害の悪化を防止することができることを理解できるようにする。傷害の防止については，生徒が身近な課題としてとらえられるように，交通事故や自然災害に関する事例などの地域教材を取り上げ，ブレインストーミングやグループでの話し合い活動などの言語活動を通して，考えを深めさせ，意欲的な学習につなげていく。また，応急手当については，包帯法，止血法など傷害時の応急手当や心肺蘇生法を取り上げ，実習を通して，応急手当の意義や手順について理解を深めることができるようにする。		
5 主な学習活動 (1)単元の指導計画（全8時間）		
	学 習 活 動	言語活動に関する指導上の留意点
第1時	交通事故や自然災害などによる傷害は，人的要因や環境要因が原因となって発生することを理解する。	言語活動を充実するため，以下の様な場を設定する。 ・傷害の発生原因についてブレインストーミングをし，出された意見をグループや全体で分類する。
第2時	中学生期に多く起こっている交通事故の現状とその原因について考え，明確にする。	・人的要因，環境要因などの関係について話し合い，それらの相互の関わりに気づく。
第3時	交通事故を防止するには，人的要因や環境要因に対する適切な対策が必要であることを考える。	・交通事故防止の課題について，話し合い活動等を通して，解決の方法を見つけて説明し合う。
第4時	自然災害は，生命や生活に大きな被害をもたらす危険があることを理解する。	・自然災害の原因について，ブレインストーミングをし，出された意見をグループや全体で分類する。
第5時	自然災害による傷害を防止するためには，日ごろから災害時の安全に備えておくことを理解する。	・地震などの事例について，被害を最小限にとどめるためにどうすればよいか，グループで考える。
第6時	応急手当の意義や目的を知り，適切な手順や方法を理解する。	・応急手当の目的について，話し合いや包帯法，止血法などの実習を通して，適切な手当は傷病の悪化防止や救命につながることをまとめる。
第7時	日常生活の中で起こるけがの手当の基本を理解し，心肺蘇生法の方法を知る。	・傷病者を発見した時に，どのような行動をとるかについて，ブレインストーミングし，出された意見をグループや全体で心肺蘇生法の手順に結び付ける。
第8時 （本時）	実習を通して心肺蘇生法の手順を理解する。	・心肺蘇生法の実習において，役割分担をし，相互評価を通して，心肺蘇生法の手順について確認する。

(2)本時の学習

目標

心肺停止に陥った人に遭遇したときの応急手当について、心肺蘇生法の実習を通して理解を深めることができる。

本時の展開

前時（心肺蘇生法の手順）の学習内容について確認する。

実習を通して、心肺蘇生法の手順を理解する。

気道の確保、人工呼吸、胸骨圧迫の意義について確認する。

応急手当の意義、心肺蘇生法の手順についてまとめる。

【解説】

【指導事例と学習指導要領との関連】

学習指導要領 第2章 第7節 保健体育 第2〔保健分野〕の2の(3)に、エ「応急手当を適切に行うことによって、傷害の悪化を防止することができること。また、応急手当には、心肺蘇生等があること。」、3の(10)に、「保健分野の指導に際しては、知識を活用する学習活動を取り入れるなどの指導方法の工夫を行うものとする。」、解説には「応急手当としては、気道確保、人工呼吸、胸骨圧迫などの心肺蘇生法を取り上げ、実習を通して理解できるようにする。」と示されている。ここでは、応急手当についての知識を習得するとともに、実習などの習得した知識を活用する学習活動を積極的に取り入れることにより、生徒の思考力・判断力等を育成することを目指している。本指導事例は、心肺蘇生法の実習を通して、前時に習得した知識を活用し、相互評価等を取り入れながら手順を確認することにより、心肺蘇生法についてより確実な理解を深めることにつながった。

【言語活動の充実の工夫】

ブレインストーミングの活用(前時)

前時に「自分が傷病者と遭遇した時にどんな行動を取るべきか」をテーマに、ブレインストーミングし、出された意見をグループで整理し短冊に記入させた。グループごとに心肺蘇生法の手順を黒板に掲示させ、他のグループと比較させた。比較した結果を基に全体で話し合い、正しい心肺蘇生法の手順を導き出すことにより、心肺蘇生法の手順のより確実な理解を図った。

心肺蘇生法の実習の中での、理解の定着を図る

本時は、心肺蘇生法の実習を通して、その意義や傷病者の発見から胸骨圧迫までの手順を理解するための学習活動である。蘇生法訓練用人体模型(シミュレーター)を用いることで、実際の人間に近い感覚で実習を行った。このことで、生徒が意欲的に学習に取り組むとともに、例えば、呼気吹込みによる胸の上がりや胸骨圧迫による4～5cmの胸骨の沈みなどが容易に目視できることから、動作の適否の確認に役立った。

実習する際は、グループをつくり、発見者、協力者、観察者、リーダーの役割分担をし、ローテーションで全ての役割を行うようにした。発見者と協力者が心肺蘇生法を手順どおりに正確に行っているか観察者が評価し、手順の修正への助言を行うなど、相互評価する活動により、互いの理解度を確認することができた。また、グループでの意見交換により、手順にとどまらず、その意義(例：気道の確保 空気の通り道をつくり呼吸がしやすいようにする等)についても話し合うことができた。さらに、前時で学習した心肺蘇生法の意義や手順について振り返り、実習での体験と比較したり、関連付けたりしたことにより、より活発な意見交換がなされ、気道確保、胸骨圧迫などの意義を踏まえた手順の理解につながった。

このように、実習の際には、生徒同士が観察により相互に評価し合う言語活動を取り入れると効果的である。また、ワークシートに心肺蘇生法の意義や手順と実習したこととを関連付けて書く欄を設け、生徒が記述したことを言語活動の評価に役立てた。



思考力・判断力・表現力等の学習活動の分類： ， ， （ 分類番号は P5 表参照 ）